

AIは医師の仕事を奪うのか

富良野医師会
北の峰病院

まえだけいたろう
前田慶太郎

人工知能（以下AI）の進化が目覚ましい。2040年代にはシンギュラリティが到来するといわれている。今の進化速度を考えるとシンギュラリティの到来はさらに早まるかもしれない。

私はユビキタス社会、IPv6等の言葉が流行った時期に情報系の大学を卒業し、医学部の受験勉強をする傍ら過去の経験を活かし、イタリア語やフランス語等の通訳・翻訳のアルバイトをしていた。医師になってからもしばらく通訳の仕事が続けていたが近年はその時間もなく、通訳の現場には何年も足を運んでいない。そんな中、通訳の仕事に戻れるか時々考えることがある。今はスマートデバイスが1台あれば日常生活での通訳翻訳作業は事足りる時代になっている。細かいニュアンスの伝達や行間を読むような解釈、文化的背景を組み込んだ通訳はまだ人にはかなわないが、語彙力等は人がAIにかなうわけもなく、AIに仕事を奪われるのは時間の問題だと感じている。実際私自身に関していえば、通訳の仕事の依頼は近年大きく減った。

頭脳労働といわれる仕事はこれからAIに置き換わっていくだろう。役者やモデル、アナウンサーといった仕事も既に一部AIにリプレイスされ、その仕事ぶりは人が行う同様の仕事と比較して違和感もかなり少ないものになってきている。カリフォルニアや中国では実用レベルの自動運転タクシーが走り、中国では自動操縦のマルチコプターが商品を配達している。私自身、画像や文章等の生成系、音声読み上げ等、様々なAIに直接お世話になっている（この文章作成にAIは用いていないことを念のため明示しておく）。そんな中、我々医師の仕事はAIによってどうなるのかを考えると興味深い。

既に技術的には医師の手技を必要としない業務に関して、かなりの部分がAIにリプレイス可能なのではないかと思う。内視鏡等、画像解析の分野では既にAIが導入され、ベテラン医師をも凌駕する結果が出ていると聞いている。診察中の会話を文字におこし、要約してカルテに記録するクラウドサービスも存在する。昔、内科医として勤めていた病院の先輩医師に「電子カルテ等で文字入力の多い内科医にとって最も重要な手技はいかに速くタイピングをできるかだ」と冗談交じりで言われたことがあり（実際に各科の医師で最もタイピングが速いのは内科医だという調査結果もある）、私自身も300KPMぐらいのタイピング速度は維持してきた。しかしながら

タイピングなんてものは近々時代遅れになりそうな雰囲気である。中国では既に実用レベルのAI診療のプラットフォームが構築されつつあると聞くと、最近の生成系AIの精度を見ていると、問診から診断、治療法の選択といったプロセスも、主観や偏見の影響が少ないAIはかなり高い精度でできるのではないかと思う。

しかしながら医師の仕事がAIに取って代わられる日が近いかということ、そうでもなさそうだ。人の命が関わるこの仕事で間違いは許されない。おそらく医師は最終的な判断をするシステム管理者として、そして人と人とのコミュニケーションを円滑にする仲介役として、今後もしばらくは残っていくのではないだろうか。参考になる例として、旅客機のパイロットがある。旅客機は、1970年に初飛行したロッキードL-1011トライスターの時代から離陸以外の作業を自動で行えるようになり、パイロットがいなくても旅客機を運航させる技術は半世紀も前に確立されていたといわれている。しかし半世紀もの自動操縦の運用実績がある現在でも旅客機には必ず2名以上のパイロットが常務して運航されている。不測の事態への対応等も含め人の命を預かる仕事であり、最終的な判断をするシステム管理者としてパイロットは必要であり、今後もしばらくは無くない仕事だろう。着陸よりも技術的に簡単な離陸が自動化されていないのも、短い滑走の間に不測の事態への対応が必要な離陸は最終的な判断を人に任せるという意味合いからだ。医師の世界も似たような経過をたどるのかもしれない。

医師の仕事がAIに置き換えられるまではまだかなりの時間がかかると予想されるが、その日はいつか必ず来ると思う。最終的にパイロットや医師の仕事がAIにリプレイスされるか否かは技術的な議論ではなく、AIにどこまで責任を認めるかという法規の問題となると考えられ、規制の緩い国からイノベーションは進んでいくだろう。

我々は人が人を診る時代からAIが人を診る時代への移り変わりの狭間にいると考えられ、AIのサポートを受けながら行うハイブリッド医療の時代がしばらく続くのではないだろうか。こうした時代を生きる我々現役医師は、AIを適切に活用し診療の質を高めつつ、慢性的に人手不足が深刻な同業界において効率を高めていくことにも注力する必要があるのではないか。そんな思いで情報系出身の私はプログラミング等を学び直し、来るべきシンギュラリティに備えようと考えている。